

# 高学年の児童が意欲的に取り組む外国語活動の研究

— 課題解決型の活動を取り入れた授業を通して —

竹澤 弘 一 郎<sup>1</sup>

小学校外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の素地」を育成するためには、高学年の児童の外国語活動に対する意欲を持続・向上させることが重要である。そこで、児童の発達段階を考慮した指導の工夫が必要であると考えた。本研究では、単元を通して一つの目標に向かって取り組む「課題解決型の活動」を取り入れた授業を行い、児童の意欲の変容からその効果を検証した。

## はじめに

小学校英語は、これまで「英語活動」等として総合的な学習の時間等で多くの小学校で取り組まれてきたが、平成20年3月の小学校学習指導要領の改訂により、第5、6学年における外国語活動が新設された。その目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」である。

この目標を達成するためには、高学年の児童の外国語活動への意欲的な取組みを促すことが不可欠である。ところが、これまで自分が実践してきた英語活動の授業を振り返ってみると、学年が上がるほど、児童を意欲的に授業に向かわせることに難しさを感じていた。

そこで、本研究では、授業の改善、指導の工夫を行うことで、高学年の児童が意欲的に取り組む外国語活動を目指すこととした。

## 研究の内容

### 1 研究の背景及び目的

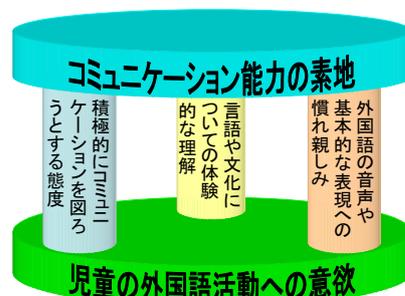
#### (1) 外国語活動の目標と外国語活動への意欲

外国語活動の目標と児童の外国語活動への意欲の関係を第1図のように考えた。「コミュニケーション能力の素地」は、外国語活動を通して養われる三つの事項にバランスよく支えられている。この三つの柱の土台に、「知りたい」「伝えたい」「分かりたい」等のような児童の思い、すなわち、「児童の外国語活動への意欲」があるととらえた。

授業を改善し、指導を工夫することで、児童の意欲を持続・向上させ、児童の前向きな取組みを促すことができれば、三つの柱はより太いものになり、しっかりと「コミュニケーション能力の素地」を支えること

になる。このように素地が養われていけば、「知りたい」「伝えたい」「分かりたい」といった児童の思いはさらに大きくなり、外国語活動への意欲の向上にもつながると考える。

また、小学校で培われる「コミュニケーション能力の素地」は、中・高等学校で育成されるコミュニケーション能力にもつながるため、その土台となる児童の外国語活動への意欲を持続・向上させることは、中・高等学校の外国語教育の充実にもつながるものといえる。



第1図 外国語活動の目標と児童の外国語活動への意欲

#### (2) 児童の意欲に関する調査と児童の姿

文部科学省(2004)や国立教育政策研究所(2009)の調査からは、学年が上がるにつれ、児童の英語活動への意欲が低下する傾向が見られる。また、「平成20年度『小学校における英語教育の在り方に関する調査研究』成果報告書」(国立教育政策研究所)の研究協力校の多くは、課題として、「高学年になるにつれ、個人差が出てくるため、英語への興味・関心を高めるよう個人差に配慮した指導の工夫が必要」(2009)と、高学年の児童への指導の工夫の必要性を挙げている。

また、これまでの自分の実践を振り返ると、高学年の児童の次のような姿から指導上の課題が見えてきた。

##### ア 活動に飽きてしまう

「簡単すぎてつまらない」とか「何のためにやっているのか分からない」というような児童のつぶやきがあった。高学年の児童にとって、適度な難しさがあり、達成感を得られる活動が必要だと考えられる。

##### イ 恥ずかしさから消極的になってしまう

日常的にほとんど使うことのない英語を一人で発話することを求められる場面では、恥ずかしさや不安があり、前向きに取り組めない様子が見られた。児童が

1 小田原市立富水小学校  
研究分野(外国語活動)

安心して取り組める環境が必要だと考えられる。

### ウ 分からなくて楽しめない

「うまく言えない」「言い方が分からない」と思ってしまう、英語の授業を楽しめない児童の姿が見られた。表現に十分慣れさせることや、自信をもたせる指導が必要だと考えられる。

### (3) 研究の目的

前項で述べたような高学年の児童の姿には、次のような児童の発達段階が深く関わっていると考えた。

高学年の児童は、主体性が育ち、知的好奇心が旺盛になり、見通しをもって継続して取り組む力も付いてくる。そして、「自分でやりたい」「もっと知りたい」「次はこうしたい」というような思いが大きくなる。一方で、羞恥心や間違いを恐れる気持ちが強くなり、「恥ずかしい」「自信がない」といった思いから、前向きに取り組めないという側面もある。

以上のことから、このような高学年の児童の発達段階に着目し、児童の外国語活動への意欲の持続・向上を図るための授業づくりを本研究の目的とした。

## 2 高学年の児童の発達段階を考慮した授業づくり

### (1) 外国語活動における「課題解決型の活動」

高学年の児童の主体性や知的好奇心、見通しをもって取り組む力をいかした授業づくりという視点から、課題解決的な学習方法が有効であると考えた。あるテーマに沿って児童自らが課題を見付け、その解決に向かって学習を進める、児童主体の学習方法である。

これを外国語活動に取り入れるにあたり、外国語活動の授業の中で、単元を通して一つの目標に向かって取り組む活動を、外国語活動における「課題解決型の活動」と位置付けた。その流れは、テーマに沿って、まずゴールを設定し、そのゴールを目指して取り組み、そして、ゴールへ到達するというものである。このように段階を踏んで徐々にゴールへ近づくことが実感できる活動は、高学年の児童の発達段階に合っていると考える。ただし、ゴールの設定を教師が主導する等、英語を扱う外国語活動の特性を考慮した教師の支援が必要である。

### ア 課題解決型の活動のテーマ

課題解決型の活動のテーマは、授業に対する児童の興味・関心を高めるため、児童の身近なところから、児童が取り組みたいと思うものを設定する。例えば、学校行事や年中行事、他教科や日常生活等と関連させたテーマにすることが考えられる。

### イ アクティビティの活用

外国語活動の授業に課題解決型の活動を取り入れる際、アクティビティを一時間の授業の中に設定する。アクティビティとは、これまでの英語活動においても実践されてきた、ゲームやクイズ、インタビュー活動のような活動のことである。

児童は、そのアクティビティを通して、各時間に行われる課題解決型の活動の一つひとつの段階を踏んでいく。つまり、各時間をアクティビティでつなぎ、一つの単元として構成するということである。これにより、児童に、段階を踏んでゴールに近づいていることを実感させることができる。

なお、アクティビティの設定にあたっては、新たに開発する以外に、これまでに実践されてきたものを活用することも考えられる。また、指導にあたっては、その時間に行う課題解決型の活動の段階を確認し、何のためのアクティビティなのかを児童が理解した上で取り組めるように配慮する必要がある。

### ウ 課題解決型の活動を取り入れた授業の流れ

#### ① ゴールの設定

児童はテーマに関連したアクティビティに取り組み、これを通して、ゴールを設定する。教師がゴールを設定する場合でも、テーマに関連したアクティビティを行うことで、児童に無理なくゴールを示すことができる。これによって、児童は、単元を通じて何のために活動するのかをつかむことができる。

#### ② ゴールに向かう活動

児童は、各時間に設定したアクティビティを通してゴールに向かっていく。児童が「自分でできた」「自分でやった」と実感できるよう、自ら考えたり選んだりする場面を意図的に設けることで、児童が主体的に活動できるようにする。さらに、知的好奇心を刺激する内容を取り入れることで、「もっと知りたい」と児童の意欲をより高めることもできる。

#### ③ ゴールへの到達

児童は、ゴールに到達することで、達成感・成就感を得ることができる。また、単元のまとめとして、クラス全体で活動の成果を交流できるようなアクティビティを設定し、活動全体を振り返ることで児童の達成感・成就感をより大きくすることも大切である。

なお、「うまく言えない」「分からない」と思っている児童もいることから、授業の中で、教師や友達の英語に触れながら、英語の表現にじつくりと慣れることができるよう、単元を通して扱う言語材料の量や内容には、十分留意する必要がある。

### (2) 「課題解決型の活動」の効果を高める工夫

外国語活動における課題解決型の活動をより効果的にするためには、高学年の児童の羞恥心や間違いを恐れる気持ちにも配慮する必要がある。そこで、安心感や自信をもたせる手立てとして、市川（2001）を参考に、次の2点を考えた。

#### ア グループでの取り組み

一人では、活動するのが不安だったり、活動に集中できなかったりするような児童も、仲間と一緒にであれば、安心して前向きに取り組むことができる。また、仲間と取り組むことで、ゴールに到達したときの達成

感はより大きなものになると考えた。これらのことから、基本的な学習形態をグループとする。

グループの編成については、児童の実態に応じた配慮が必要だが、児童がより多くの友達とかかわることができるよう、無作為な編成を行うことも考えられる。

### イ 振り返りカードの活用

児童に自信をもたせることを主な目的として、自己評価を中心とした振り返りカードを活用する。内容は、自己評価に加え、一言感想と相互評価を取り入れた。

自己評価は、原則として外国語活動の目標に基づいて項目を立て、活動内容を踏まえて児童が評価しやすい内容にする。また、過去の評価と見比べやすくするため、数直線上での評価にする等、形式にも配慮する。

一言感想は、そこに書かれた児童の声を指導にいかすことに活用する。一人ひとりの児童の思いを知ること、励ましたり認めたりすることができる。

相互評価は、友達同士で認め合い、「自分もがんばろう」「友達に認められたい」という前向きな思いをもたせることができる。

このような振り返りカードを効果的に活用するには、教師が、児童の活動の様子と自己評価の変化、感想や相互評価を総合的にとらえた上で、児童が自分の良いところやできたことに気付くようにコメントを返すことが重要である。

## 3 検証授業

以上の考えに基づいて授業を実施し、児童の観察、振り返りカードの記述、事前事後のアンケート調査、抽出児童の変容を基に検証を行った。

### (1) 実施概要

対象児童 第6学年 1クラス 32名

授業時数 全5時間（平成21年9月28日～10月19日）

単元名 What do you want? - 応援旗を作ろう -

- 単元目標
- ・ 国旗の由来や意味に興味をもつ。
  - ・ 欲しい物を積極的に伝え合おうとする。
  - ・ 色や形の英語表現を使って応援旗を作る。

### (2) 単元の作成にあたって

#### ア 言語材料について

言語材料は、外国語活動の経験が浅いという児童の実態を考慮し、既習の「色」と、なじみ深い「形」を扱うこととした。また、コミュニケーションする場面を設定しやすくするために、“What do you want?”

“～, please.” “Here you are.” “Thank you.”

“You’re welcome.” の表現を単元を通して扱った。

#### イ 課題解決型の活動のテーマとゴール

先述の言語材料を使ってどのような課題解決型の活動が展開できるかを考え、市の体育大会に向けて「応援旗を作ろう」というテーマを設定した。この体育大会は、6年生全員が参加する行事であり、多くの児童にとって大きな関心事だと考えたからである。

体育大会の会場で、一人ひとりが旗を持って応援できるよう、ゴールは、各自で一つずつ応援旗を作ることとした。

### (3) 実際の指導と授業の様子

#### 【第1時】世界の国旗について知ろう

第1時では、導入で「国名」のチャンツを行った後、フラッシュカードやミニゲームで「色」「形」の英語表現に触れさせた。そして、その表現を使ったアクティビティ、“National flag quiz”を行い、最後に「みんなも体育大会に向けて応援フラッグを作ってみませんか」と投げかけ、授業を終えた。

“National flag quiz”は、児童が“Hint, please.”の表現を使って、教師から聞いた「色」や「形」を手がかりに国旗を当てるアクティビティである。このクイズを通して国旗の由来や意味について触れることで、児童の知的好奇心を刺激し、興味・関心を高め、自分たちも意味を込めた応援旗を作りたいという思いをもたせてゴールを設定することができた。

また、「ドイツ」と“Germany”のような、日本語と英語の国名を知り、「(カタカナで書く)外国の国の名前は、全部英語だと思っていた」と、新たな発見に興奮気味の児童や、「早く旗を作りたい」と期待を膨らませる児童が見られた。振り返りカードの記述には、「また国旗についてやりたい」「国旗にもいろいろ意味があるんだな」等、国旗やその国について興味を深めている様子が見られた。

#### 【第2時】グループを作ってテーマを考えよう

第2時では、前時の英語表現を復習し、英語ノートのチャンツ“What do you want?”を「色」「形」の表現にアレンジして行った。その後グループづくりゲーム“Group-making game”を行い、一緒に活動するグループを作った。そして、グループで応援旗のテーマを決めた後、個々の旗の“デザインづくり”を行った。

“Group-making game”は、教師が無作為にカードを配り、児童は自分と同じカードを持っている友達を見付けてグループを作るというアクティビティである。初めは不安がり、一人では友達に声を掛けられずにいた児童も、仲間が見付かると、一緒に英語で声を掛け、安心して活動できるようになっていく様子が見られた。

二つめのアクティビティ、“デザインづくり”では、使用する型紙をグループ内で貸し借りさせ、コミュニケーションする場面を設定した。しかし、実際には、日本語で型紙を貸し借りしたり、無言で作業したりする児童がほとんどであった。「もっと英語で言おう」と指導することも考えたが、表現への慣れ親しみが不十分であることが原因だと判断し、ここでは、英語を話そうとする児童をほめることに努めた。

#### 【第3時】材料集めに必要な表現に慣れ親しもう

第3時では、前時と同じチャンツを行った後、グループ対抗のリレーゲーム“Card-collecting relay”を

行い、応援旗を作るために欲しい色や形の材料をやり取りする表現を練習した。これにより、次時で行う“材料集め”に児童が自信をもって取り組めると考えた。

“Card-collecting relay”は、指定されたカードを集めるリレー形式のアクティビティである。児童の意識が競争に偏り、コミュニケーション活動に集中できなくなる心配があったため、何のためのゲームかを確認しながら活動を進めた。これにより、きちんと会話を交わしながら活動しようとする雰囲気を作ることができた。また、グループ内での会話を通して活動するため、安心して取り組む児童が多く見られた。さらに、言い方が分からなかったり、忘れてしまったりすると、グループ内で教え合ったり、教師に質問したりする意欲的な姿が見られた。

#### 【第4時】材料を集めて応援旗を作ろう

第4時では、二つのアクティビティに取り組んだ。

“材料集め”と“応援旗づくり”である。どちらも児童同士、あるいは教師との会話を通して行った。

“材料集め”では、「お客（もらう）」と「お店（渡す）」を前後半で交代して行い、すべての児童がこれまで慣れ親しんだ表現を使う場面を作った。お客のときは自分の必要なものをもらうため、個人でもらいに行くこととした。お店はグループ内で順番を決め、お客に一对一で対応することで、それぞれが自分の役割をもって取り組めるようにした。これにより、不安だったり自信がなかったりする児童が、グループ内で助け合って自分の役割を果たそうとする等、前向きに取り組む様子が見られた。

二つめのアクティビティ、“応援旗づくり”では、初めに英語表現を使って教師から使用するカラーペンを受け取る。このとき、児童同士がコミュニケーションする場面を作るために、カラーペンの数を不足させておき、必然的に児童間で貸し借りさせるようにした。第1時から同じ表現に繰り返し触れてきたことで、児童の英語を使うことへの抵抗を減らすことができた。第2時のように、英語でのコミュニケーション活動が活発に行われなくなるのではないかと不安もあったが、カラーペンだけでなく、はさみやのり等の貸し借りも英語で行おうとする等、自ら英語を使おうとする児童が多く見られた。

#### 【第5時】作った応援旗を紹介しよう

第5時では、応援旗を完成させることでゴールへ到達し、活動全体の振り返りとして、応援旗をクイズ形式で見せ合う、まとめのアクティビティ、“Flag quiz”を行った。一人が一つずつヒントを言えるように、グループ内で協力してヒントを考え、グループごとに出題者となって、クイズを出し合った。

クラスの友達の前で、英語でヒントを言うのを恥ずかしがる児童も多かったが、グループの仲間に助けられながら、全員がヒントを言うことができた。児童は

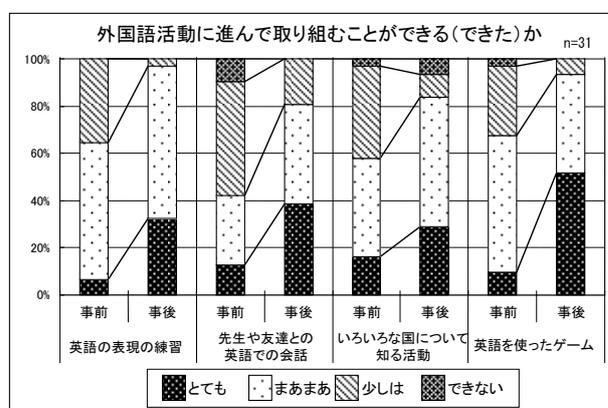
自分の役割を果たすことができ、満足そうだった。

## 4 検証結果

### (1) 事前調査・事後調査から

検証授業の事前事後に、授業に取り組む姿勢について、児童へのアンケート調査を行った。また、事後調査では、課題解決型の活動、グループでの取り組み、振り返りカードの活用についての調査も行った。

まず、事前事後に行った、授業に取り組む姿勢についてのアンケート結果を比較する。事前事後共にCDやフラッシュカードを使った「英語の表現の練習」、授業全体を通しての「先生や友達との英語での会話」、生活や文化等「いろいろな国について知る活動」、そして「英語を使ったゲーム」の四つの活動への取り組みへの意識を調査した結果、4項目すべてにおいて、肯定的な回答の児童の増加が見られた（第2図）。



第2図 アンケート結果1

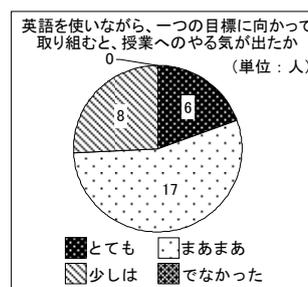
また、4項目の回答を数値換算して事前事後で比較すると、事前よりも事後で肯定的な傾向が強まった児童は31名中25名であった。否定的な傾向が強まった児童は3名いたが、そのうち2名は事前事後共に比較的肯定的な回答をしており、著しい意欲の低下は見られなかった。つまり、検証授業において講じた手立てが多くの子どもの意欲の持続・向上を促したといえる。

では、どのような手立てが児童の意欲の持続・向上につながったのかを、事後の調査を基に分析する。

### ア 課題解決型の活動について

「英語を使いながら、一つの目標に向かって取り組むと、授業へのやる気が出たか」という、課題解決型の活動についてのアンケート調査には、約4分の3の児童が「とても」あるいは「まあまあ」やる気が出たと回答している（第3図）。

また、「とてもやる気が出た」と答えた6名のうち5名と、「まあまあやる



第3図 アンケート結果2

気が出た」と答えた17名のうち14名の児童には、事前

事後調査の比較で、意欲の向上が見られた。

以上のことから、目指すべきゴールを設定することが、児童のやる気を引き出す一つの手段となり、前向きな取組みにつながることを確認できた。

### イ グループでの取組みについて

アンケート調査で、グループで取り組んで、「とてもよかった」「まあまあよかった」と答えた28名の児童に、その理由を四つの選択肢を設けて複数回答可として調査したところ、第1表のような結果が得られた。

第1表 アンケート結果3

項目	人数
お互いに思っていることを気楽に伝え合えたから	17名
協力して活動に取り組めたから	16名
気楽に英語が言えたから	11名
自分の力が発揮できたから	7名
その他	・分からないことを教えてもらったりできたから。 ・友達とやったら、一人でやるよりもさみしくなかったし、相談することができて、旗がより良くなったと思うから。(n=28)

事前調査で「先生や友達との英語での会話」についての質問に、否定的な回答をしていた児童や、事前よりも事後で回答が肯定的になっている児童は、「お互いに思っていることを気楽に伝え合えたから」という理由を選んでいる割合が高い傾向が見られた。「応援旗づくり」という課題解決型の活動を、グループというお互いの考えを伝えやすい環境で行うことが、児童の前向きな取組みを促し、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成にもつながったといえる。

### ウ 振り返りカードについて

振り返りを行うことにより、児童が何を実感したかを調査した。四つの選択肢を用意し、複数回答可で調査したところ、第2表のような結果が得られた。

第2表 アンケート結果4

項目	人数
もっとがんばろうと思うようになった	17名
その時間に自分ががんばったことが分かった	16名
次の時間が楽しみになった	15名
めあてが分かって進んで取り組めるようになった	7名
その他	・「今日のがんばり賞」でますますやる気になった。 ・友達よりもがんばろうと思った。(n=31)

これらの選択肢を一つも選ばなかった児童はおらず、半数以上の児童が二つ以上の項目を選択している。このことから、振り返りカードの活用が、多くの児童にとって、意欲を持続・向上させるための一助となっていたことがうかがえる。

振り返りカードの一言感想からは、「次の時間が楽しみ」「早くやりたい」と、意欲が、次の授業へとつながっていたことが読み取れた。また、「難しいけど言えるようになってきた」「英語で(材料を)もらえてうれしかった」と、自分のできるようになったことを振り返り、自信を付ける児童も見られた。

また、自信がもてず、前向きに取り組めない児童に

対して、できているところを自覚させる等、振り返りカード上で適切にコメントすることで、取組みの様子が少しずつ積極的になる変化が見られた。

これらのことから、振り返りカードの活用が児童の前向きな取組みを促す手段となったと考えられる。

### (2) 抽出児童の変容と考察

検証授業にあたり、事前調査における取組み姿勢に関する調査の回答が、肯定的・中間層・否定的な児童各1名を抽出し、その変容を分析した。

#### ア 抽出児童A【回答が否定的な児童群】

事前調査では「なんで英語の授業があるのか知りたい」と記述していたA児は、「分からない」「できない」という思いが強く、授業への取組みが積極的ではなかった児童である。

初めはなかなか前向きに取り組むことができなかったが、第3時のころから分からないことを質問するようになり、その姿勢に変化が現れ始めた。第4時には、英語表現を教師に確認しながらも、自ら英語でコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。

A児は、事後調査に「応援旗を作ったら(応援旗づくりを通して)、みんなと英語がよく話せた」という記述を残しており、「応援旗づくり」のためには「英語」が必要だととらえるようになっていたことが読み取れる。これは、「応援旗づくり」という、単元を通してゴールを目指す課題解決型の活動の効果といえる。

また、「応援旗づくり」にグループで取り組む中で、「できない、分からないのは自分だけではない」ということに気付いたことも、A児の変容につながったと考えられ、グループでの取組みの効果が認められた。

これらのことに加え、第3時の振り返りカードの「分からないことが分かるようになったから楽しかった」という記述からは、単元を通じて同じ表現に触れるアクティビティを展開することが、「分かる」「できる」といった楽しさを実感させ、A児の意欲の向上を促したことが読み取れる。このことから、児童が慣れ親しむのに無理のない内容や量の言語材料を用いて課題解決型の活動を展開することが、より効果的に児童の意欲を高めると考えられる。

#### イ 抽出児童B【回答が中間層の児童群】

理解力、行動力のあるB児の事前調査からは、「もっと変わったゲームをしてみたい。テストみたいなのもやってみたい」と、単純な活動では満足できない様子が見られた。

B児はいろいろな英語を知っているにもかかわらず、事前調査の「英語の表現の練習」「先生や友達との英語での会話」についての回答は、4段階で2番目に否定的なものであった。一方、事後調査では、この2項目について、最も肯定的な回答をしている。

振り返りカードの記述には、「旗のテーマを決めるときにすごく悩んだ。それでタイムロスしてデザインカ

ードが白紙だけど、次がんばる」「お店とお客さんとのやり取りが難しかった。でも、できるだけ英語で話そうとがんばった」といったものがあつた。これまでも「英語の授業は簡単すぎる」と思っていたB児が、「応援旗づくり」という課題解決型の活動を通して、適度な難しさとチャレンジする面白さを実感できたことがうかがえる。また、事後調査の「(第4時で) どうしても英語をしゃべらないといけなかったから、そこで英語をしゃべる力が増えたと思った」という記述からは、課題解決型の活動の一つの段階を英語で行うという必然性をもたせたことで、B児も満足感を得られる活動となったことが読み取れる。

またB児は、振り返りカードについての調査で、「次の時間が楽しみになった」「もっとがんばろうと思うようになった」「めあてが分かって進んで取り組めるようになった」の三つの選択肢を選んでおり、振り返りカードの活用によって、見通しをもち、単元を通して意欲を持続・向上させていったことも確認できた。

#### ウ 抽出児童C【回答が肯定的な児童群】

C児は、事前調査の「進んで取り組んでいるか」のすべての項目について4段階中2番目に肯定的な回答をしていた。一方で、「英語の授業のときのゲームで、友達と話すとき、間違えたりするとちょっと恥ずかしい」との記述があり、授業では、十分に自信がもてないと積極的に活動に取り組めない姿も見られた。

C児に最も大きな変容が見られたのは、第2時と第4時である。第2時の“デザインづくり”では、ほとんど英語を話さなかったC児が、第4時の“応援旗づくり”では、検証授業では扱わなかった「はさみ」や「のり」も英語で言おうとする姿があつた。

C児の事後調査には、「前より英語を話しやすくなった。その理由はいっぱい英語を話す時間が多くて、英語を話すのに慣れてきたからだと思う」との記述があつた。表現に繰り返し触れることで、話すことへの抵抗が減り、自信につながったことが読み取れる。これは、同じ表現を扱った様々なアクティビティにより、飽きずに表現に触れさせることができ、英語を話すことへの抵抗を減らすことができた効果といえる。このことから、様々なアクティビティを通して行われる課題解決型の活動は、音声や表現への慣れ親しみにも効果があると考えられる。

#### 5 研究のまとめ

児童にとって、身近で生活にいかせるものをテーマにした課題解決型の活動を取り入れた外国語活動の授業が、児童の意欲の持続・向上を促すことを検証できた。指導の工夫として、グループでの取り組みや振り返りカードの活用を取り入れ、児童に安心感や自信をもたせることで、課題解決型の活動の効果が高まることも確認できた。

また、児童の実態に合わせた言語材料を選び、いろいろなアクティビティを通してそれに触れさせていくことで、英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみにつなげることができた。さらに、アクティビティに英語を話す必然性をもたせたり、文化的な内容を含むアクティビティを設定したりすることで、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成や言語・文化への体験的な理解にもつなげることができた。これらのことから、課題解決型の活動が、コミュニケーション能力の素地を、効果的に養う一助となることも確認できた。

課題解決型の活動を取り入れるにあたっては、テーマと言語材料をどう組み合わせるか、どのようなアクティビティで課題解決型の活動の段階を踏ませるかということを考えていかなければならない。また、テーマの設定、ゴールの設定、言語材料の精選、アクティビティの精選、教材・教具の作成等、入念な準備が必要である。そこで、まず、児童が慣れ親しんできた表現を使う場として、学校行事や他教科等、児童の学校生活と関連させ、適切な時期に設定する。そして、徐々に実践事例を蓄えていく。こうした一つひとつの実践の蓄積を、次年度からの授業に活用していくことが、今後の外国語活動の充実につながると考える。

#### おわりに

本研究を通して、高学年の児童の発達段階を考慮した授業の流れを考え、児童の生活から活動内容を探り、児童の実態に合わせて指導を工夫することで、児童の外国語活動への意欲の持続・向上を実感できた。

今後、児童を中心に据えた授業づくりに努め、実践を積んでいきたい。

#### 引用文献

国立教育政策研究所 2009 「平成20年度『小学校における英語教育の在り方に関する調査研究』成果報告書」([http://www.nier.go.jp/shoei\\_h20/shoei.html](http://www.nier.go.jp/shoei_h20/shoei.html)) (2009.5.8取得)

#### 参考文献

文部科学省 2009 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社  
文部科学省 2004 「小学校の英語教育に関する意識調査 調査報告書」  
市川伸一 2001 『学ぶ意欲の心理学』PHP研究所  
東野裕子・高島英幸 2007 『小学校における プロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書店  
松川禮子 2004 『明日の小学校英語教育を拓く』アブリコット  
吉田研作 他 2008 『小学校英語指導プラン完全ガイド』アルク